

2020年4月19日(日)／説教者：國分美生

説教：「顧みられる神」

聖書：創世記16:1～16

10年たっても神の約束が実現せず、子どもが与えられないことにしびれを切らしたサライは自分に仕えていたエジプト人奴隷のハガルを、アブラムに差し出すことを決断します。神が約束なされたことを、人間の手で成し遂げようと。古代の婚姻法では、妻が子どもを産まない場合、夫は妻の奴隷との間に子どもを持つことが許されました。この常識の元にサライはハガルを、人間ではなくまるで物のように扱います。サライにとってはハガルは利用価値のある、身代わりの道具でした。ハガルとサライの対立は子どもを産む、産まないという問題がきっかけであり、それは当時の社会全体を支配していた男性優位の価値観、家父長制度に関係していました。その制度と価値観を支持する形で生きていたアブラムはこの二人の女性の分断に加担しているのですが、彼はどこか他人事です。大きな視野でとらえれば、ハガルとサライはともに、男性によって翻弄された女性たちです。一部の人間が力を持ち、他の人々を支配するという社会の中では必ず、弱い者がさらに弱い者をたたくという構図があります。

ハガルはサライよりもずっと社会的に低い位置にあり、より不利益や痛みをこうむる立場でした。ハガルは身の危険を感じて逃げ出し、やがて泉のほとりで主のみ使いと出会います。み使いは「元居たところに戻るように」といいます。しかもサライに従順に仕えなさいと、絶望的なことまで。しかし続く祝福の言葉から、極限状態の中にあるハガルに神の憐れみと祝福がもたらされます。ハガルは「あなたこそ私を顧みられる神です」と証して、サライの元に帰って行きました。今いる場所から前にも後ろにも進めない、けれど、彼女はすでに神に顧みられ、憐れみと祝福を受けた者として、希望を携えて生きていくことになります。

ハガルは、搾取され、悪用され、また、貧しく、居場所のない者たちの代表として私たちの目の前に立ちます。新型肺炎に対する政府的の外れの対策、普天間基地から発がん性物質・PFOSの流出等・・・人々の命があまりにも軽んじられる社会のただなかに私たちは置かれています。けれど私たちは、ハガルと共にあったように今ここに復活のイエス・キリストが希望の光として共にいてくださり、共に生きてくださることを信じます。(國分美生)